

[書評]

イヴォ・アンドリッチ著、栗原成郎訳

『宰相の象の物語』

(松籟社、2018年、252頁)

Michael Martens.

Im Brand der Welten. Ivo Andrić. Ein europäisches Leben

(Wien: Zsolnay, 2019, 494 S.)

三谷 恵子

1.

イヴォ・アンドリッチ (Ivo Andrić 1892-1975) は、今から 60 年近く前の 1961 年にノーベル文学賞を受賞したユーゴスラヴィアの作家である。生まれはオーストリア時代のボスニア、出自はカトリック系だが、本人は宗教的帰属について公的に表明することはなかった。外交官としてヨーロッパに勤務し、最後はベルリン駐在ユーゴスラヴィア大使まで経験した作家は、生まれ故郷のボスニアを素材として創作の世界を確立した¹。代表作とされる『ドリナの橋』(邦訳は松谷健二郎、恒文社、1966) は、セルビアとの境界に近い町ヴィシェグラードを舞台とし、400 年近いボスニアの歴史を織り込みながら移りゆく人々の姿を描いた物語、『ボスニア物語』(岡崎慶興、恒文社、1972) は、ボスニア中央部に位置するトラヴニクを軸に、ヨーロッパの歴史の一コマをとらえた作品である。『呪われた中庭』(栗原成郎、恒文社、1983)² では、ボスニアのフランシスコ会派修道士フラ・ペタルが話し手となって、ボスニアからレバント、トルコへと話の舞台を移しながら読者を幾重にも重なる物語の迷宮に誘う。アンドリッチの語りの技が冴える作品である。

2.

ボスニアを舞台としたアンドリッチの作品はすでに日本でも多く訳されているが³、まだ紹介されていない作品も相当数ある。『サラエボの鐘 短編集』(田中一生、山崎洋共訳、恒文社、1997) 以来ひさびさとなるアンドリッチ作品集『宰相の象の物語』は、そうした本邦初出の作品 4 点を収めている。

表題作『宰相の象の物語』(原著は 1947) は、長編『ボスニア物語』と同じトラヴニクの町を舞台に、権力という隠れ蓑を利用することを知った宰相と、彼が連れてきた象の「フィル」が引き起こす混乱を描く。時はオスマン帝国末期、赴任地にやっ

てきた宰相ヂェラルウディン - パシヤは、到着してすぐ人々に恐怖を植えつけ、そのまま公衆の前から姿を隠す。この姿なき恐怖とは対照的に、フィルは人々の前に現れて気ままにふるまう。町の人々の、バーチャルな恐怖と憎しみは現前にいるフィルに投影され、「信仰と伝統から言って、すべての動物を保護し、害獣さえも保護し、犬や猫や鳩に餌を与え、害虫も殺さない」人々が、「敵を憎むように象を憎み、その殺害を企てる」（38頁）ようになっていくのだった。「『どんな真実よりもはるかに真実味がある』と言うところの、かのオリエントの嘘の話」（7頁）という冒頭の言葉が示唆するように、この作品は、作家の創作の本質を考える上でも示唆的な一編である。

続く『シナンの僧院に死す』（1936）は、純潔で崇高な人生を送った修道師が死の間際に、過去に負ったトラウマを思い出す瞬間をとらえた話。トラウマとなったのは、女性と無縁の人生を送った主人公が若い頃に遭遇した二人の女、というよりは二つの恐怖だった。ユーゴ解体後のボスニアでは、反アンドリッチ言説が猛威をふるったが、その最先鋒となったリズヴィチは、この作品にアンドリッチのボスニア・ムスリムに対する無理解と蔑視、はては「恋愛妄想」までを見た（244頁）。けれども訳者はこれに反論し、ここにあるのはアンドリッチの、人の悪についての運命論的世界観だとしている⁴。

本書後半に置かれた『絨毯』（1948）と『アニカの時代』（1931）は女性を中心人物として描いている。『絨毯』は、一枚の絨毯が、第二次世界大戦の中に生きる「カータ婆さん」と、それより半世紀近く前、オーストリア兵たちがやってきた時代の「アンジャ」を結びつける。二つの世界大戦を体験したアンドリッチにとって戦争は大きなテーマだったが、それを作家は、市井の人々に投影して表した。老齡ながら毅然とした生き方を見せる女性を描いたこの小品も、そのような作品の一つといえるだろう。

本書に収録された4作品中でもっとも刊行年の早いのが『アニカの時代』である。アンドリッチはここですでに、後年の作品にしばしば現れる、自分ではどうにもならない運命的な力に振り回される人間たちを登場させているが、その中で、美しく力強い目をした罪悪の女王アニカは際立った存在といえる。さえない女の子だった彼女はやがて美しく育ち、けれど愛の不成就をきっかけに娼館を開いて男たちの世界を攪乱する。他の者たちと同じように運命に翻弄され、けれどもその運命に果敢にいどみ、そして破れる彼女の姿は、のちに書かれる『ドリナの橋』に登場する、同じように美しく力強く、けれどアニカとは正反対にあらゆる悪を遠ざけて生きたロツィカへと通じる線をもつようにも見える。

栗原氏が翻訳の底本とした1981年のプロスヴェタ版アンドリッチ選集（全17巻）では、『宰相の象の物語』『絨毯』は第4巻、『シナンの僧院に死す』は第5巻、そして『アニカの時代』は第6巻と別の巻に収録されている。けれども、オスマン時代の

ボスニアという、アンドリッチが得意とした設定で書かれた4編を読むと、改めてこの作家が世界の危うさと、そこに生きる人間の脆さとしたたかさを様々な切り口で描いたことがわかる。

訳者の栗原成郎氏は、東京大学、北海道大学、創価大学でスラヴ・ロシア語学、スラヴ・ロシア文化論を講じられた。『呪われた中庭』で作家の語り口を熟知した訳者の翻訳は安定感があり、アンドリッチの紡ぎ出す夜話をそのまま聞いているかのように感じられる。訳書にはこのほか、イヴァーナ・ブルリッチ＝マジュラニッチ『昔々の昔から』（松籟社、2012）、アントーニイ・ポゴレーリスキイ『分身：あるいは我が小ロシアの夕べ』（群像社、2013）など。また、著書に『スラヴ吸血鬼伝説考』（河出書房新社、1980）、『スラヴのことわざ』（ナウカ、1989）、『ロシア民俗夜話——忘れられた古き神々を求めて』（丸善ライブラリー、1996）などがある。

3.

上記の『宰相の象の物語』が端的にそうであるように、アンドリッチ作品の多くは、ボスニアの歴史を素材に織り上げられ、それによって高い評価を得た。けれども作家の死後十数年のうちに、同じ作品が同じ理由によって、ある人々の間では袋叩きにされ、別の人々の間ではユーゴ時代とは別の意味で祭り上げられることになった。この経緯、とくにボスニアにおけるアンドリッチ批判については、奥彩子（2018）⁵に詳しく述べられている。過剰なまでのアンドリッチ批判、もしくは礼讃は、もちろんユーゴスラヴィア解体とその後の内戦という事態と相まって起きたものだったが、戦争が終結した後も、かつてのユーゴ諸地域でのアンドリッチ評価はそのまま固定してしまった感があつた。その意味で、2012年に刊行された Žaneta Djukić Peršić, *Pisac i priča. Stvaralačka biografija Ive Andrića* (Novi Sad) (ジェナタ・ジュキッチペルシチ『作家と物語 イヴォ・アンドリッチの創作の伝記』) や、同年の Dušan Glišović, *Ivo Andrić, Kraljevina Jugoslavija i Treći rajh 1939-1941*. (Beograd) (ドゥシャン・グリショヴィチ『イヴォ・アンドリッチ、ユーゴスラヴィア王国、第三帝国 1939-1941』) などの、新たなアーカイヴ資料を用いた研究書が現れたことの意義は大きいと言えるだろう。これらの著作、また時の経過によって、アンドリッチをめぐる騒動も過去のものへととなりつつある中、2019年に新しいアンドリッチの伝記が刊行された。Michael Martens, *Im Brand der Welten. Ivo Andrić. Ein europäisches Leben* (Wien: Zsolnay Verlag) (ミハエル・マーテンズ『世界の大火の中で——イヴォ・アンドリッチ あるヨーロッパの生活』) (以下『大火』) である。著者のマーテンズは1973年ハンブルク生まれのジャーナリストで、ロシア、ウクライナなど東欧各地で暮らした経験をもつという。2002年からドイツのフランクフルター・アルゲマイネツァイトゥングの政治記者として7年間ベオグラードに在住した。この経歴からもわかるように、『大火』は専門書

ではなく一般向けノンフィクションとして書かれたものだが、全 494 頁というかなりの大著となっている。

『大火』は 4 章に分かれ、時系列をたどって生涯を記すという伝記のオーソドクスな形で展開する。第 1 章 *Europas brennende Blumen* (「ヨーロッパの燃える花」) は、アンドリッチの両親の話から始まり、少年時代、そして反オーストリアの活動家として逮捕されてから第一次世界大戦末期までの人生を仔細に描く。もちろん背景には、19 世紀末からやがて戦争へと緊張を高めていくヨーロッパが織り込まれている。章のタイトルにある *brennende Blumen* 「燃える花」は、1914 年にザグレブでアンドリッチが発表した詩『早春賦』の中に現れる言葉からとったものだろう。この作品によって彼は反体制分子として逮捕されることになったのだった⁶。次の第 2 章 *Die Geräusche des Krieges* (「戦争の轟き」) では、1918 年から 1941 年までの外交官アンドリッチの足跡が、激動する情勢とともに再現される。とくに 1939 年から 1941 年のユーゴスラヴィア大使在職期間については、かなりのページが割かれている。第 1 章、第 2 章ともに記述は細部にわたり、アンドリッチについてある程度知る読者にはやや冗長な印象を抱かせる部分もあるが、とはいえベルリン駐在大使としてヒトラーやゲーリング、あるいはエルンスト・ヴァイツゼッカーらと接する場面や、ユーゴスラヴィアとドイツの仲介役として奔走する様子は、作家であると同時に実務者でもあったアンドリッチの姿を伝えており、読みごたえがある。第 3 章の *Genosse Ivo* (「同志イヴォ」) は、1941 年のベオグラード帰郷からストックホルムでのノーベル賞受賞式までのアンドリッチに焦点をあてる。とくにこの章のタイトルにもなっている *Genosse Ivo* のセクションでは、アンドリッチが戦後次々に大作を発表していった様子や、彼がいかにして新生ユーゴスラヴィアの作家となり得たかが描かれていて、興味深い。ここから見えてくるのは、アンドリッチが新たな体制に歩み寄ったというよりは、共産主義ユーゴスラヴィアが国民的作家を必要としていた、という構図である。最後の第 4 章 *Die Brücke über die Brücke* (「橋を越える橋」) では、ノーベル賞受賞以後のアンドリッチの晩年の暮らし、そしてその死後アンドリッチ作品がたどった運命——『1920 年の手紙』(邦訳タイトルは『サラエボの鐘』) がいかにボスニア戦争で悪用されたかなど——が綴られる。末尾の *Ein europäisches Leben* には著者のアンドリッチ評がある。

本書は、著者自身もあとがきで述べているように、上述のジュキッチ、ペルシッチやグリショヴィチを始めとする先行研究に多くを依拠したものだろう。記述の根拠となる資料は巻末にまとめて掲載されているが、ただしこれらが本文中でどう使われているのかが示されておらず、これは一般書という性格から仕方ないことかもしれないが、著者オリジナルの発見がどこにあるのかが見えてこない点は残念である。第 4 章のアンドリッチ批判現象の扱い方もやや紋切り型の感がある。それでも、全体を通して、20 世紀ヨーロッパとユーゴスラヴィアの歴史、そしてそこに生きた一人の傑出

した人物を浮かびあがらせたのは著者の功績だろう。イヴォ・アンドリッチもユーゴスラヴィアという国家も次第に過去のかなたへと薄れつつある今、この地域にはあまり馴染みがないかもしれないドイツ語圏の読者が、作家とその祖国の長い1世紀について知る機会を得るという点で、本書は意義ある一冊である。

アンドリッチ自身が「すべては本に書いてある」と言ったように⁷、ほんらい私たちが『宰相の象の物語』のような作品のみで作家を知ればいいのだろう。けれども後年のアンドリッチ批判問題までもがアンドリッチの人生の一部となってしまったかのような今日にあっては、この複雑な運命をたどった作家を知るための“道標”として、本書のような伝記的記述は必要だろう。

注

- 1 アンドリッチの生涯については栗原成郎「イヴォ・アンドリッチー作家と作品ー」『宰相の象の物語』220-239頁、また木村彰一・栗原成郎「アンドリッチの人と文学」『ドリナの橋』(1966)5-26頁、田中一生「イボ・アンドリッチの軌跡——青春の理想と文学の間」羽場久泥子編『ロシア革命と東欧』彩流社、1990年、178-198頁を参照。1970年代までのアンドリッチ評伝についてはたとえば Celia Hawkesworth, *Ivo Andrić. Bridge between East and West* (London, Dover N.H: The Athlone Press, 1984), pp.263-267.
- 2 ほかに工藤幸雄(集英社、1967年)、またより早い栗原成郎(ノーベル賞文学全集、主婦の友社、1972年)でも読むことができる。
- 3 本文中で挙げた作品のほかに『サラエボの女』(田中一生、恒文社、1982年)、『アリヤ・ジェルゼレズの旅』(徳永彰作編、筑摩世界文学大系『近代小説集』、1965年)、『象牙の女』(栗原成郎)、『イエレナ 陽炎の女』(田中一生)(いずれも徳永康元編『東欧幻想小説集』、白水社1971年)などの翻訳がある。
- 4 サラエヴォ大学教授で文学研究者だった M. リズヴィチが *Bosanski muslimani u Andrićevu svijetu* (Sarajevo, 1996) でアンドリッチの作品を徹底的に“分析”しその反ボスニア性を批判したことはよく知られている。本書でも243-244頁で訳者が言及している。リズヴィチの批判とそれに関係したことがらについては奥彩子「アイデンティティーの相克——ボスニア・ムスリムによるアンドリッチ批判の系譜」『スラヴ学論集』2019/Vol.22、pp.171-196に詳しく述べられている。
- 5 上記注5の奥(2018)を参照。
- 6 この時代のアンドリッチに関しては注1の田中(1990)を参照。アンドリッチのこの詩も同論文183-184頁に訳が掲載されている。
- 7 奥(2018)、172頁。